

父

川崎区支部 吉澤 庸子（子）

戦没者 吉澤 八三郎

戦没地 フイリピン

お父さんと呼んだ記憶は余りありません、でも父に抱かれて家の庭を散歩したこと、家族で出掛けて父の背におぶさった事、炬燵の中で私が火を蹴とばして父の丹前に火が付いた事など、断片的な記憶は残って居ます。父が兵隊に行く時、昭和十九年六月十五日と聞いていますが、近くの八幡神社に沢山の人々が集まり嬉しくて喜んでいました。父の出征から一カ月後面会が許され、父の好物のぼた餅を母が作って、母、兄、姉と私四人で面会に行きました。兵舎から兵隊さんが沢山出て来るのに父はなかなか出て来ませんでした。最後に出て来たのを覚えています。幼い子供達に自分の姿を印象付けたかったのでしょうか？ 短い面会のあと赤いフンドシが渡されました。

多分南方だろうと云う憶測のもと旅立って行きました。私が五歳の時の父との永遠の別れになろうとは…その後フイリピン・セブ島のセブ市に着いたと一通のハガキが来たので役所で撮ってくれた家族の写真を母が送りましたがそのまま戻って来てしまいました。川崎も激しい戦火に見

まわれ焼野原になりました。

それから半年後終戦、必ず帰って来るとの思いで食卓には父の写真を中心に家族で食事を囲んで居りました。「陰膳」と云うのだと母が教えてくれました。私も小学生になり学校から帰ると必ず父が帰ってくると思いながら、楽しみに家路を急いだものでした。今日はまだ、じや明日かも知れないと思いながら日が過ぎて行きました。専業主婦であつた母も働く様になり、兄は新聞配達少年になり、祖母（父の母）は近所のお百姓の手伝いをする様になりました。

祖父はすでに他界して居りました。相変わらず父の写真を中心に陰膳をしていました。母は勤めの休みに京都舞鶴港へ何度か通いましたが会えることはなく終戦から三年後戦死の知らせが来ました。母は負傷してでも帰って来て欲しかったと云っていました。祖母は息子の帰りをどんなにか待ちわびていた事でしよう。口には出さなかったけど淋しく悲しかった事でしよう。息子が戦死して八年後心臓病で亡くなりました。

それから六年後父は靖国神社に祀られました。父は神様になったのです。私が二十歳の頃だと記憶しています。家族四人で靖国神社で昇殿参拝した様な気がします。勲八等白色桐葉章と云う勲章を頂きましたが、勲章よりも生きて帰って欲しかったと思いました。戦争の犠牲は二度と繰り返してはならないと思っています。